

高地性集落の代表、紫雲出山遺跡

数年前の春、天理小学校6年生のクラスで社会科の授業を参観する機会があった。その授業では参加型の討論が試みられ、生徒たちには、「自分が生きるなら縄文時代？ 弥生時代？」というテーマが教師から与えられた。生徒たちがどちらかを選び、意見を黒板に書きならべた結果、縄文派は21人、弥生派は16人で、縄文派の方がやや多かったのは意外ではなかった。縄文派の意見は、ほとんど判子を押したように、戦争がなく平和、あるいは平等だからというものだった。これに対して、弥生派の意見には、お米があり食料不足がないから、戦争より米作りの方が利益があるから、などというものが見られた。生徒たちの意見を通して実感されたのは、かつて、弥生時代は稲作の始まった平和で明るい時代というイメージだったが、いつの間にか、戦争が始まり格差が広がる不穏な時代というイメージに変わってしまったということだ。

弥生時代のイメージがこのように変化したのは、高地性集落として知られる香川県紫雲出山遺跡の発掘調査がきっかけだ。弥生時代＝稲作農耕文化というかつてのイメージを作り出したのは、奈良県唐古遺跡や静岡県登呂遺跡だったが、どちらも水田を営むのに適した低地に集落跡が立地している。これに対して、紫雲出山遺跡は、瀬戸内海に突き出た庄内半島の丘陵上、標高350mの高地に位置する集落跡で、昭和30年～32年(1955～57年)、京都大学の小林行雄氏が主導する発掘調査が行われた。小林氏によれば、瀬戸内海地域の弥生時代中期の遺跡になぜ高地にあるものが多いのか、そしてそれらにしばしば貝塚が伴う場合があることについて、漁撈集落の独立の傾向が認められないかという問題が、戦前からの学界の懸案だった。



写真1 浜から見た紫雲出山遺跡

しかし、戦後になると、瀬戸内西部の高地性集落について軍事的性格が唱えられるようになり、昭和39年(1964年)、紫雲出山遺跡の発掘調査報告書で、当時は若手の弥生時代研究者だった佐原真氏が、弥生時代中期における石鏃の発達と高地性集落の出現を関連づけ、その軍事的性格を強調した(小林・佐原1964『紫雲出』)。高地性集落とは、政治的にまとまっている地域集団が、征服・連合という形でより大きな政治的単位に統合されてゆく過程の対立・抗争を示す証拠で、紫雲出山遺跡は、内海航路を監視し、掌握するための重要な軍事的・防衛的な拠点だったと考えられたのだ。「紫雲出山遺跡が戦いにそなえた村だった」というこの解釈は、やがて考古学に関する専門的な書物だけでなく、歴史の概説書、さらには、中学・高校の歴史教科書や副読本、参考書などでも取り上げられ、弥生時代こそが日本列島で戦争が始まった時代という認識が拡散していった。



写真2 紫雲出山遺跡から見た瀬戸内海

遺跡の現地は、その後、瀬戸内海国立公園事業の一環として、道路や植栽、駐車場などの整備が進み、昭和58年(1983年)には香川県の県指定史跡となった。さらに、平成元年(1989年)、展示スペースを併設した小さな展示館が設けられた。その展示館の解説パネルで、当時、奈良国立文化財研究所の指導部長を務めていた佐原真氏は、前年の香川大学による発掘調査で住居跡や倉庫跡が見つかったことで、紫雲出山遺跡が紀元前1～紀元後1世紀頃の高地性集落の代表の位置まで名実ともに高められたと記している。平成元年といえば、今からちょうど30年前、佐賀県で吉野ヶ里遺跡の発掘調査がマスコミを通して脚光を浴びたのと同じ年だ。吉野ヶ里遺跡の甕棺墓で発見された首のない人骨の写真は、戦争が始まり不穏な時代という今も流布している弥生時代のイメージを増幅させていった。

紫雲出山遺跡の再調査と歴史的 성격

平成24年(2012年)、三豊市教育委員会の事業として、遺跡の今後の保存の万全を期し、歴史的価値を活かした活用法を検討することを目的とした確認調査が開始された。平成26年(2014年)、新しく設置された発掘調査整備委員会に筆者も委員として加わることになり、同年7月、久しぶりに訪れた遺跡の現地はアジサイが咲き乱れ、瀬戸内海の島々を見下ろす眺めの良さが印象的だった。教育委員会の塩治琢磨氏が担当した発掘調査は、平成29年(2017年)まで続き、大型建物の柱跡かと思える柱穴遺構などが見つかった。平成31年(2019年)には報告書が完成するとともに、念願かなって遺跡の現地が国史跡の指定を受けた。

一方、瀬戸内地域における弥生時代の高地性集落に関しては、軍事的側面よりも、経済的観点から理解する考え方が早くに現れている。昭和45年(1970年)、間壁忠彦氏は、特異な高地性集落は、低地の集落とつながりを持ちながら、眼下を行き来する船の状況に応じて、友好的あるいは敵対的に、物資を入手したと考えたのだ。瀬戸内海の水運に関与したとして高地性集落の経済的性格を重視するこの学説は、その後、支持を集め、現在ではむしろ有力になっている。ともあれ、紫雲出山遺跡の新旧の発掘調査では、各種の土器、稲を収穫するための石包丁など、低地の集落と変わらない遺物が出土し、石鏃の多さのみから軍事的性格を強調することにはやはり問題がある。なぜ、このような高地に集落を構える必要があったのか、紫雲出山遺跡に関しては、まだ多くの謎が残されている。